

## ラピュタのペンダントのある場所 ——スタジオジブリと筑後地方，柳川——

石橋 潔<sup>1)</sup>

### Where There is a Pendant of Laputa —— Studio Ghibli and Yanagawa, in Chikugo Region ——

Kiyoshi ISHIBASHI

【要約】スタジオジブリ第1作，天空の城ラピュタは，柳川を舞台にした物語となる可能性があった。自然との共存は可能かというテーマを追った映画「風の谷のナウシカ」のラストシーンに納得できない思いをもった宮崎駿は，旅の途中で立ち寄った柳川という町に大きな影響を受けた。柳川は，水と人間が共存する歴史と文化をもっており，その共存の象徴としての，ひょうたんの御守りを伝承する町でもある。天空の城ラピュタには，この柳川の影響が大きくみられる。

【キーワード】天空の城ラピュタ，水天宮，柳川，柳川掘割物語，宮崎駿，ひょうたん

#### 1. はじめに

子どものころに聞かされた話が，どこまで本当のことだったか確かめてみたいと思うことがある。たとえば家に由来が伝わる古い宝石，よく遊んだ神社に残る伝承，そのことを確かめるなかで，自分と広い世界とのつながりに気がつくことがある。

1986年公開のスタジオジブリの第1作となる映画「天空の城ラピュタ」<sup>2)</sup>は，そんな伝承を確かめようとする冒険の物語である。主人公は，家に伝わるペンダントをもつ少女と，冒険家の亡き父をもつ少年。映画は，少女が空高く飛ぶ飛行船から落ちるシーンから始まる。気絶した少女は，ペンダントの不思議な力によって浮かび上がり，通りがかった少年に助けられる。そして2人は，そのペンダントの伝承をおってラピュタという天空の城を探す冒険にでる。その冒険のなかで，少女は，自分が天空の王国を捨て大地に戻る選択した一族の子孫であることを知る。

この映画は，間違いなく，日本の子どもたちがもっともよく見てきた映画の1つである。主題歌「君をのせて」は小学校の音楽の教科書に掲載され，歌い継がれている。テレビではここ30年，この映画をほぼ2年ごとに放送し続けている。そして放送される日，映画のクライマックスに合わせて，主人公の言葉（「パルス！」）をインターネットに一斉に書き込むことが続いており，2013年の放送時にはTwitterの世界記録を更新したという（毎日新聞 2013.8.5）<sup>3)</sup>。この映画を監督した宮崎駿は今や世界的に広く知られることになった。

この映画に多くの子どもたちは胸を躍らせてきただろう。だがこの物語は，単なる子ども向けのおとぎ話だったのだろうか。私たちが生活する現実の世界とのつながりをもっていないのだろうか。

この論文では、この映画の作られた経緯をたどってみたい。そこで出てくるのは、現実のある地域との関連である。その地域とは九州の福岡県にある、柳川である。

天空の城ラピュタは、これまでさまざまな人によってその作品が分析されてきた。しかしこの映画の、一見すると単純明快なストーリーによって、空想世界の「古典的な冒険活劇」（野村 1986）だと捉えられがちである。または、スィフト原作のガリバー旅行記との関係など（中村 2007、水谷 2000）が論じられることが多い。しかしこの映画を、ファンタジーの世界にだけ閉じこめて理解するのは適切ではない。

以下では、天空の城ラピュタ以前に構想されていた柳川を舞台としたアニメシナリオの存在を指摘する（2章）。そして天空の城ラピュタに残る柳川の影響を指摘（3章）し、ラストシーンへの影響を検証する（4章）。そして最後に柳川に伝承される御守りとこの映画とのつながりを考えてみたい（5章）。そのような考察を通じて、筑後地域の伝承が、映画というメディアを通して再び伝えられていく現代の伝承の形を捉えてみたい。

## 2. 柳川との出会い

### 2.1 柳川を舞台にしたシナリオ

1986年に徳間書店アニメージュ編集部が編集した「The Art of Laputa」は天空の城ラピュタの原画集であるが、この本の冒頭では、天空の城ラピュタの企画が始まるまでのいきさつが紹介してある。それを書いたのは、当時、宮崎駿らに密着して仕事をしていた、アニメージュ編集者の亀山修<sup>4)</sup>である。それによると、天空の城ラピュタの構想を練り上げるまでに、宮崎駿が柳川に旅しており、そしてそのあと書かれた最初のシナリオが柳川を舞台とした物語だったという。

宮崎駿が柳川を旅したのは1984年の3月ごろ。これは彼が原作から製作まで手がけた映画「風の谷のナウシカ」の公開直後にあたる。映画製作の重圧から解放された宮崎駿は、アニメ同人会の招きで博多を訪れたあと、北原白秋や柳川鍋にひかれて、亀山修とともに、ぶらりというように柳川を旅している（亀山 1986）。

そしてその旅から帰京してすぐ徳間書店から次回作の打診があったとき、宮崎駿が提案したのは、意外なことに、柳川を舞台にした少年少女たちの冒険物語だったという。

このシナリオは二転三転しており、細部にわたってわかっているわけではないが、The Art of Laputa（亀山 1986）では、その概要を以下のように紹介している。

舞台は現代の日本、柳川。主人公は高校生。柳川の掘割（水路）をめぐる物語である。冒頭は天空の城ラピュタの冒頭と同じように、落ちてきた主人公がもう1人の主人公と出会うシーンから始まる。

冒頭、水路際を女子高生がラッタッタ（当時流行ったスクーター：筆者注）で走っている。あるいは、男の子が自転車で走ってきて水路に落ちるところから始まる。とにかく二人は出会う。女の子は漁師町に住む、アルバイトにアサリをとっている美少女（！）

ウム、何かを期待させる始まりだ、と思っていると、今度は「社会的広がり」を持った事柄で行き悩む。

「隠された水路」はどうだろう？ — いまは市街になっているが、とある橋のとある角度からみると、かつてそこに水路があったことがわかる。都市化に没したその水路が、どこから始まりどこで終わっているのか。それを調べ始めた少年たちのグループの行動は、美

少女の出生の秘密とからまり、意外な方向に発展していく。(亀山 1986: p.8)

こうした地域色を全面に出したシナリオは宮崎駿の作品としてはめずらしい。この作品は高校生を主人公とした「青春物」だが、柳川の掘割をめぐって水と人間の間関係を描く、「社会的広がり」をもつストーリーが検討されたという。

このアニメシナリオは宮崎原案として出され、その後、高畑勲らとともに検討されていく。そして高畑勲が監督、宮崎駿が設定、レイアウトで作品を作るという製作体制が決まる。またその後の計画として、秋口までにスタジオをたちあげ、11月には作画インする、ということが決まっていたという。このときたちあげることになるスタジオが、スタジオジブリである。

その後、高畑勲がシナリオを描くために柳川を訪れたあと、「記録映画にした方が面白いって帰ってきた」という(野村 1986)。この映画は、高畑勲によってスケジュールと予算を超過しながら3年にわたって製作されたが、宮崎駿は、この映画製作に、風の谷のナウシカで得た興行収入をつぎこみ、さらに足りなくなると自ら天空の城ラピュタの映画製作にとりかかることによって予算を確保している(鈴木 2013)。このドキュメンタリー映画は、高畑勲監督、宮崎駿製作の作品として、天空の城ラピュタの1年後の1987年、「柳川掘割物語」という名前で公開されている。

## 2.2 風の谷のナウシカのラストシーンで抱えた葛藤

だが、現実とは異なる世界を描くことの多いアニメーション映画監督、宮崎駿は、なぜここまで、柳川という地域に関心を寄せたのだろうか。

このことは、作ったばかりの「風の谷のナウシカ」という映画の結末に関係ある。亀山修によると、宮崎駿は自分が作ったこの映画のラストシーンにどうしても納得できない葛藤を抱えながら、柳川へ旅をしていたという(亀山 1986: p.7)。

この風の谷のナウシカという映画は、地球環境が汚染され、人間の住めない腐海の森に飲みこまれようとする未来社会が舞台である。

人類は限られた土地に細々と生き残り、絶滅の縁に立たされている。防護マスクがないと人間は外の世界で呼吸することができない。その様子は放射能汚染、大気汚染、温暖化に直面する現代社会の姿を先取りしている。このような絶望的な状況のなかでも人類は互いに争い続け、さらに世界を汚染し続ける。だがそのなかで、1人、主人公ナウシカ

が、自然と人間、そして人間同士の共存の可能性を探ろうとする。しかし争いをやめず自然を破壊し続ける人類に、腐海の森の主、王蟲(おうむ：巨大なムシ)たちが怒り、巨大な暴走を

### 関連年表<sup>5)</sup>

#### 1984年

- 3月11日 「風の谷のナウシカ」公開
- 3月末 博多および柳川に旅をする
- 4月中旬 柳川舞台のシナリオ浮上
- 5月初旬 映画製作体制の大枠を決める
- 6月中旬 高畑勲・久保進、柳川へ  
課題図書の提示  
スタジオジブリ登記
- 6月18日 高畑、柳川より帰京
- 数日後 「水の流れる街」仮題が決まる
- 6月末ごろ アニメ映画ではなくドキュメンタリー映画にすることに
- 12月7日 天空の城ラピュタ原案

#### 1985年

- 2月末 企画第二稿完成
- 5月 ウェールズ地方に2週間ロケハン  
(1985-1986) 柳川掘割物語の撮影

#### 1986年 「天空の城ラピュタ」公開

#### 1987年 「柳川掘割物語」公開

はじめ、人間たちは最後の瀬戸際に追い込まれる。

だが問題となるこの映画のラストシーンは、ナウシカがその暴走する王蟲たちの突進の前に自分の命を投げ出し、犠牲となるというものだった。そしてこの主人公の自己犠牲の前に、王蟲も、人間も争いをやめ、ナウシカは、空に持ち上げられ、命を復活する。

このラストシーンについて、宮崎駿は自分が描いたにもかかわらず納得できない、たとえば次のように語っている。

ぼくは（ナウシカを）ジャンヌ・ダルク<sup>6)</sup>にするつもりはなかったし、宗教色は排除しようと思っていたのに、結果として、あそこきて（ラストシーン、ナウシカが王蟲に持ち上げられて朝の光で金色に染まる）宗教画になってしまったんです。（宮崎 1984＝亀山 1986<sup>7)</sup>）

それまでさまざまな制約のなかで自由に映画を作ることができなかった宮崎駿が自分の持てる力をそそぎこんで、自然との共存の可能性という壮大なテーマを描いた。だがそのテーマに対して、明確な答えをしめせずに、安易な結末にしてしまった。そういう気持ちが宮崎駿のなかに生じていたということなのだろう。

当時の毎日新聞のインタビューに答えて、「自分のテーマの理解度が65点」（毎日新聞、1984.4.22）と厳しい自己評価を語っている。また別のインタビューでは「何か大事な部分を落っこしたまま、上っ面のクリスマスの奇跡映画のようなものを作ってしまったなという後ろめたさ」を語っている（宮崎 1996）。

当時、宮崎駿は45歳。柳川への旅の途中で、同行した亀山修に「とんでもないものをつくっちゃったなあ」とポツツともらしたという。長編アニメーション作家として、独自の作品世界を追求し始めた1人の作家に、身に余る大きな課題をあたえることとなった<sup>8)</sup>。

### 2.3 柳川掘割物語 ～水との共存してきた文化

柳川への旅は、自分が背負ってしまった課題への答えを、無意識のうちに探そうとする旅だったのだろう。

たまたま立ち寄った場所である柳川は、九州の北部の筑後平野に位置する人口約7万の小都市である。筑後川と矢部川が有明海にそそぐ場所に位置し、大量の土砂の堆積によってできた地形をもつ。隣接する有明海は最大6mもの干満差があり、干潮になると広大な干潟が生まれる。ここでは古くから干拓がおこなわれ、土地を拡大させてきた。このような土地での生活は、水を得ること同時に、排水が重要となる。そのためこの地域では灌漑や排水を担う水路が毛細血管のように発達した。柳川では家の裏手に掘割が流れ、そこで生活用水としてだけでなく、運搬などにも利用された。

このような水路の存在は、その地域特有の文化を発達させている。堀干し（ドロアゲ）という堀の清掃は、その地域の人々総出でおこなわれ、水の神をまつる地域の祭（水天宮祭りなど）も盛んである（柳川市史別編 2002, p.120）。

だがこのような文化をもつ柳川も、都市化のなかで掘割が汚染されてきた歴史をもつ。高度経済成長期に汚染され、ドブ川となった柳川の掘割をコンクリートで固め、地下に埋める計画が1970年代の後半に持ち上がったという。しかしこれに対して、市民が反対し、浄化保存運動が始まり、掘割が保存されたという歴史をもつ。この出来事は、環境再生の事例として全国

的にも注目をあつめていた<sup>9)</sup>(広松 1990, 亀山 1986).

おそらく宮崎駿は、この柳川という町の歴史と文化に触れて、そこに人が自然とつきあっていく現実的な答えがあると感じたのだろう。

宮崎駿と高畑勲が作った柳川掘割物語というドキュメンタリー映画から、彼らが当時、この柳川という町にどのように関心をもったのかがわかる。上映時間2時間46分の学術性の高いこの記録映画は、柳川での人々の暮らしを丹念に追って描いている。水と共に生きていくために、いかに高度な水路の技術を作り出していったのかについての歴史を描き、そこで生まれた生活の様子を描いている。そしてこの掘割が汚染され埋め立てられそうになったこと、そのとき市民が連帯して保存運動を展開したことなどを描いている。映画の最終章では、柳川の祭り、沖端水天宮祭を、この町の連帯の象徴として描いて、この映画はおわる。

宮崎駿と親交のあった映画評論家小坂和男によると、宮崎駿は、柳川での水路の浄化運動の話を知って、「風が吹きぬけるような思い」がして「ほとんど発作のような感動のせい」<sup>10)</sup>で柳川が舞台となった記録映画を作ることになったと語ったという(小坂 1987)。

この映画は直接的には、高畑勲による作品であるが、しかし、当時を知る、のちのスタジオジブリ代表鈴木敏夫<sup>11)</sup>によると、宮崎駿もその後、柳川に「甥や姪を全員引き連れて行ったりして」(2013)、足を運んでいたようである。

風の谷のナウシカのラストシーンでは、1人の救世主の自己犠牲に、物語の結末をゆだねた。しかしそれは、人間と自然との問題の本質的な解決にはならないと感じていたに違いない。そして柳川には水の町としての文化があり、そこに住む人たち1人ひとりが地域の未来を選択しようとしている。当時、宮崎駿や高畑勲らは、この柳川という町に自然と人間の共存の現実的な形を見出そうとしていたのだろう。

### 3. 天空の城ラピュタにあらわれる柳川

このような柳川との出会いの影響は、そのあと製作された、天空の城ラピュタという映画にどのような影響を残しているのだろうか。この映画の企画は、旅のあとに構想されたアニメシナリオがドキュメンタリー映画とすることが決った6ヶ月後に再スタートしている。だがこの柳川舞台のアニメシナリオは、水路に落ちて主人公同士が出会う冒頭のシーン、伝承の謎を追うというストーリーという点で天空の城ラピュタと類似する。つまりこのシナリオは形をかえて天空の城ラピュタに引き継がれたのではないだろうか。そうであるならば、柳川の痕跡がこの映画のなかにほかにも残っているのではないだろうか。まずここでは天空の城ラピュタの舞台設定に残る柳川の痕跡を探てみたい。

#### 3.1 水の流れる理想郷としての天空の城

映画のなかで、主人公たちがたどり着くのは、空に浮かぶ城ラピュタ島である。この天空の城は、世界を支配した軍事基地でもあるが、一方で自然と調和した文明をもつ理想郷としても描かれている。そこでは庭園の生き物とその庭番をするロボットの共存する静かな世界だ。そしてその理想郷は、水路のめぐる場所として描かれている。

図1は、雲が晴れてこのラピュタ島の全景が見えた場面である。ここには水路がめぐらされている。これらは直角だったり、十字路であったりする。そしてこの水路は住居とみられる建物のすぐ横を流れている。そしてこの水路は水位のコントロールを受けた水路である。この形は柳川の掘割とよく似ている。



柳川掘割は「もたせ」という仕組みに特徴がある。柳川では、掘割の水を雨季にも乾季にも一定に維持しなければ生活が維持できない。もたせとは、堰、樋門、V字型の橋台などの組み合わせによって、水位を一定に保つ仕組みである。

実際に柳川にいてみればわかるが、その水面は、地面とわずか数10センチの位置にあることが多い。つまり水位がコントロールされているのである。そのような掘割が、生活用水として、そして物品を運び、移動のための水路としての役割を果たしていた。そのような掘割が、柳川の町では民家や建物のすぐ横を流れているのである。

天空の城ラピュタ製作の時期は、先にも述べたように、柳川掘割物語という映画を作成していた時期にあたる。そのなかで柳川は、自然と人間が共存する町のモデルとして描かれていた。天空の城ラピュタを理想郷として描くとき、その柳川のイメージが投影されることは当然ありえることである。

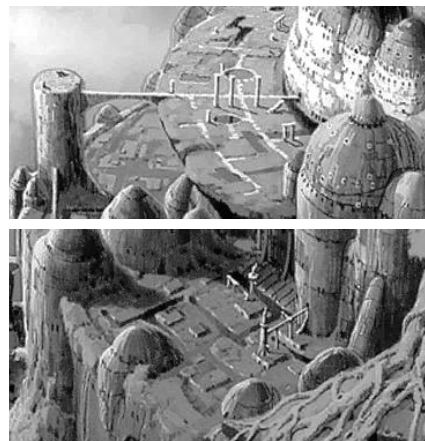


図1 天空の城ラピュタの水路

### 3.2 鉱山町としての北部九州のイメージ

天空の城ラピュタのもう1つの舞台は、主人公の少年が住む炭鉱町である。この舞台にも、柳川近辺の地域の痕跡が残っているように思える。

この鉱山町のイメージは、一般には宮崎駿が2週間ほどイギリス、ウェールズ地方を旅してスケッチしたものがもとになっているとされる。しかし実際には、宮崎駿によると物語はその旅行にいく前に「全部組み立ててあった」という(野村 1986)。そしてウェールズの旅の成果についてインタビューで聞かれて、次のように答えている。

(ウェールズの旅の成果は)なかったんじゃないですか(笑)。実際のウェールズを忠実に再現しようと思っているわけじゃありませんし。ただ面白いと思ったのは、ウェールズの炭鉱労働者たちの住む住宅というのは、日本の北九州あたりにあった炭鉱と同じで、こういう社会の中に残った、ひとつの非常に緊密で大きな共同体ですね。(宮崎駿インタビュー、野村 1986)

ウェールズに旅して、そこで日本の炭鉱と同じものがあることを確認したことが旅の大きな成果であると述べている。その日本の炭鉱とは北部九州周辺の炭鉱である。

これまで述べてきたように、この映画を作るときに、宮崎駿が現地に足を運んでいたのは、北部九州にある柳川である。そしてその北部九州には筑豊炭鉱をふくめて炭鉱地帯が広がっていた。柳川のすぐ隣の大牟田には三井三池炭鉱がある。宮崎駿が柳川に初めて旅した1984年当時はまだ閉山していない。柳川を旅したわずか数か月前には、有明坑坑内火災事故という大規模事故<sup>12)</sup>が起き、炭鉱労働者の生活が報道されていた時期でもある。

映画のなかでは、鉱山町の人たちが、主人公たちを守るために、追っ手と町ぐるみの大喧嘩を繰り広げる場面がある。こうした情に厚い炭鉱町の共同体のあり方は、むしろ外国ではなく、

当時、宮崎駿が訪れていた足もとにあったものが原型となっていたというべきだろう。宮崎駿は、盟友、高畑勲と東映動画の労働運動のなかで知り合っている。三井三池炭鉱の炭住といえば労働運動の団結をしめす場所として意識されていたはずだ。

### 3.3 参考にした物語の類似性

またそもそも天空の城ラピュタは、最初に書かれた柳川舞台のシナリオの物語ときわめて類似していた。柳川舞台のシナリオは高校生を主人公とした「青春物」映画だったということだが、そのストーリーの骨格は、天空の城ラピュタと同じように謎を探る少年少女たちの冒険物語に近いものだったと考えられる。

The Art of Laputa のなかで亀山修は、当時、宮崎駿がシナリオを練っていたとき参考にした物語の書名を挙げている（亀山 1986）。それは1950－1960年代のイギリスの児童文学で、「海賊の島」「ハヤ号セイ川を行く」「シェパートン大佐の時計」という物語である。これらの物語は、いずれも、イギリスを舞台に、家や町に伝わる伝承を追った冒険の物語である。

「海賊の島」（Townsend 1968＝1976）は、空想好きの少女が語る海賊の宝の話を信じた少年が、机をひっくり返して作った小舟で、川のなかの中州を目指す物語だ。

「ハヤ号セイ川を行く」（Pearce 1955＝1984）では、家に伝わる宝の伝承を探す少年たちの夏休みの冒険の物語である。主人公の少年の家に400年ほど前から伝わる1片の詩が手がかりとなる。2人の少年はハヤ号というちいさなカヌーでこの宝を探す冒険にでる。

また「シェパートンの大佐の時計」（Turner 1964＝1968）では、40年あまり前に預けられた大時計の隠された謎を探しに少年たちが冒険する物語である。この「シェパートンの大佐の時計」には、天空の城ラピュタのボムじいさんという登場人物に似た人物がでてくる。そして映画のなかのセリフと同じように、冒険の途中の主人公たちに「小鬼がきた」というセリフ<sup>13)</sup>を語り、謎を解く重要なヒントをあたえる。

このような3つのイギリス児童文学からわかるのは、当時構想されていたアニメシナリオは、天空の城ラピュタにきわめて似た冒険物語だったということだ。いずれも主人公たちが出会い、伝承をめぐる冒険にでる。そしてその冒険を通じての少年少女の成長が描かれる。しかも物語の舞台はイギリスが舞台であり、天空の城ラピュタの舞台と重なる。

宮崎駿は、天空の城ラピュタの構想が持ち上がったとき、わずか5分間でそのシナリオを最初から最後まで語り、みんなを驚かせたという（鈴木 2013）。何度も「暗礁にのりあげて」（亀山 1986）、構想を練り直していた柳川舞台のシナリオとは大違いである。

おそらく天空の城ラピュタの物語は、柳川舞台のシナリオとしてその骨格が練り上げられていた。しかも現実の社会的問題を描くという厄介な課題は、柳川掘割物語というドキュメンタリー映画に切り離れた。このことによって天空の城ラピュタは冒険活劇としての面白さを純粋に追求できたのだらう<sup>14)</sup>。

## 4. 何を根拠に決断をするのか ～ナウシカからラピュタへ

天空の城ラピュタの舞台設定には柳川の痕跡がさまざまな形で残っている。では映画のラストシーンはどうだろうか。ここにもこの柳川の影響がみられるのではないだろうか。先にも述べたように、風の谷のナウシカのラストシーンに納得できなかったことが、柳川との出会いを生んだ。そうだとすると、天空の城ラピュタのラストシーンには、前作とは異なる結末が描かれているのではないか。

#### 4.2 主人公の違い ～ふつうの少年少女

舞台となる世界の違いを除けば、風の谷のナウシカと天空の城ラピュタはよく似ている。どちらも世界を支配するための科学技術利用をくい止めようとする主人公が描かれる。

しかしこの2つの作品は物語の骨格を共通させながらも、この2つにはやはり違いがある。それは天空の城ラピュタの主人公が、ふつうの少年少女であるという点だ。風の谷のナウシカの主人公は、風の谷の姫君として生まれ、そして空中でグライダーを自在に操る能力をもっている。これに対して、天空の城ラピュタの主人公は、情熱だけは強い、炭鉱町に住むふつうの少年であり、またもう1人は山のなかでヤギを飼い、ひっそりと暮らす少女である。

宮崎駿自身も、この主人公の違いを強く意識している。あるインタビューのなかで、風の谷のナウシカとの違いについて、「ぼくはラピュタでいちばん大事な点はふつうの少年を主人公にしたことだと思っている」(1986a)と答えている。ナウシカのような特別な存在を主人公にするほうが物語を組み立てやすいが、しかしあえて観客と同じ、ふつうの少年少女を主人公に選んだというのである。

では、ふつうの主人公たちのラストシーンを、宮崎駿はどのように描いているのだろう。

#### 4.3 大地へ舞い降りていく ～受け継いできたものへの自覚を根拠に

この映画のクライマックスは、天空の城の巨大な軍事的文明を復活させようとする人物と対決するシーンである。拳銃を向けられて、ペンダントを渡せと脅かされた少女は、相手の顔をみつめ「あなたには石は渡さない」と強い口調で語り始める。そして自分の故郷に伝わる歌の一節を口にしながら、次のように語る。

今は ラピュタがなぜ亡びたのか、私、よくわかる。 Gondola の谷の歌にあるもの。土に根を下ろし、風とともに生きよう。種とともに冬を越え、鳥とともに春を歌おう。どんなに恐ろしい武器を持っても、かわいそうなロボットを操っても、人は土を離れては生きられないのよ。

人は土を離れては生きられない。その根拠としたのは、主人公たちが親から子へ引き継いできた歌だ。そして主人公たち2人は、受け継いできたペンダントに手をかさね、「バルス」という滅びの言葉を口にすると、天空の城は崩壊する。

そして崩壊しながら昇っていく天空の城を離れて、主人公たちはグライダーを動かし、空を下っていく。そこには自分の仲間たちと、自分の生きてきた世界がある場所である。

このラストシーンは、ナウシカが王蟲によって持ち上げられ、空高く復活するラストシーンと対照的である。

この描き方には、風の谷のナウシカで背負い込んだ課題への解答をしめしているように思う。1人の救世主の決断を待つだけでは、私たちの未来は生まれない。1人ひとりの“ふつう”の人間が、それぞれ未来を選択していくことが必要である。だがその“ふつう”の人間はどのように未来への選択をできるのか。それは親から子へ代々引き継いできたものへの自覚によって可能になるだろうということだ。

自分が何を受け継いできたかを知ること。そのうえで未来への選択をおこなうこと。このことが風の谷のナウシカのラストシーンで抱え込んだ宮崎駿の解答であるように思う。そしてそこにいたるまでに柳川という水と共存することを選択してきた町との出会いがあったというこ



とだろう。

## 5. ラピュタのペンダントのある場所

### 5.1 筑後地方に伝わるペンダント

最後にもう1つ、天空の城ラピュタに影響を与えたかもしれない、柳川の影響をとりあげてみたい。それは、天空の城ラピュタのペンダントである。

主人公の少女の家ではこのペンダントを代々受け継いできた。そしてこのペンダントは、空中に落ちた主人公を浮かんで助ける不思議な力を持ち、伝承を追う冒険の手がかりとなるものである。

このラピュタのペンダントによく似たものが柳川にもある。それはちいさなひょうたんの形をしたペンダントの御守りである。なかに水天宮<sup>15)</sup>のお札が入っている。

このひょうたんの御守りは持ち主を水難から守るといういいつたえがある。このひょうたんの御守りは、子どもが水におぼれたとき浮いて助ける、またはくるくる回って、子どもが落ちたところをしめしてくれる（柳川歴史編集委員会、2004, p.173）といわれる。また「ひょうたんの中のお札を川に投げ込んだら、溺れて沈んでいた子どもが浮いて助かった」という言い伝えもある（西日本新聞 2015.3.15）。

柳川を含め、水路の多い筑後地方には、このひょうたんを子どもにつける風習がある。幼児、小学生は首からこれをつけていた。子どもたちの生活のすぐ隣に水路があり、そこに誤って落ちてしまえば命にかかわるからである。近年では日常的にこれをつけている子どもたちを見かけることは少なくなったが、それでもこの地方ではよく知られており、久留米を総本宮とする各地の水天宮でもらい受けることのできる水難除けの御守りである。

柳川でも漁師町、沖端地区に「水天宮さん」と親しみを込めて呼ばれている沖端水天宮がある。ここの水天宮祭のある5月3～5日ではこのひょうたんの御守りが販売され、子どもたちの首にこの御守をかける習わしがある。この沖端水天宮祭は、沖端地区の6町の持ち回りでこの準備をおこなっている。担当となった町は、各世帯で手分けして、手作業によって、このひょうたんにお札を入れ、栓をして準備するという。その数はおよそ2000個で、その売り上げは、全国の水天宮での1、2位の売り上げを誇っているという（柳川市 2008）。

このひょうたんの御守りは、筑後地方で子ども時代を送った人にとっては、水との付き合いを象徴する<sup>16)</sup>。柳川出身で自分の故郷の掘割の歴史を卒業論文に選んだ学生<sup>17)</sup>（堤、2007）は、「柳川での掘割との付き合いを象徴するもの」として、このひょうたんについて次のように書いている。

柳川の子どもたちは、この“ひょうたん”を親から与えられ、その意味を知ることによって“掘割”というものを感ずる。……“ひょうたん”は柳川の生活の中で今でも残っている掘割との付き合いの象徴である。



図2 天空の城ラピュタ出会のシーン

## 5.2 掘割に落ちた主人公はペンダントをつけていたか

そうであるならば、宮崎駿が最初に構想した柳川舞台のシナリオでも、主人公はこのひょうたんの御守りを首につけていたのではないか。

このシナリオでは、主人公の女の子は、柳川の漁師町に住んでいる。つまり沖端水天宮の祭をおこなう地域の出身である。そしてこのシナリオで主人公たちは、掘割に落ちて助かり、その後、その掘割の伝承を探る冒険を開始する。もしそうであるならば、この地域の掘割との付き合いを象徴する御守りをつけていてもおかしくない。というより、そのような物語であるならば、つけているべきなのだ。

この柳川のひょうたんの御守りのことを、宮崎駿、高畑勲たちも知っていたはずである。なぜならこの御守りは、ドキュメンタリー映画「柳川掘割物語」に登場しているからである<sup>18)</sup>。

この柳川掘割物語の最終章は、沖端水天宮祭を描いているが、そのなかで、親が子どもにこのひょうたんの首につける場面が描かれている。抱きかかえられた赤ん坊が、母親とおばあちゃんから首につけてもらっている場面である(図4)。

たしかに、The art of Laputa に記載されたシナリオには、掘割に落ちたときに、主人公がその御守りを首につけていたかどうかについては、何も触れていない。しかしそう推測することが奇妙ではないほど、天空の城ラピュタと柳川舞台のシナリオは連続している。

つまり、天空の城ラピュタのペンダントの原型は、筑後地域の子どもたちに伝承されてきた、ひょうたんの御守りであったのかもしれないのだ。

## 6. まとめとして 伝承の物語

この論文では、ここまで、天空の城ラピュタと柳川との関係を読み解いてきた。

自然との共存の可能性をどのように描くかという課題を背負った宮崎駿は、柳川という場所に、世代から世代に伝承される、水との共存の文化をみいだそうとした。そして天空の城ラピュタには、この柳川との出会いの影響が多く残っている。この論文では、このことを映画の製作プロセスをたどるなかで検討してきた。

この映画は、公開後30年にもわたって、人々によって愛され続けてきた。その点でこの映画は、現代日本で伝承される文化の1つ、とさえいえるだろう。だがそこにどんなメッセージが込められていたか。そのことは、その伝承を伝えようとした人の気持ちをたどらなければ見えてこない。

現代を生きる私たちは、おそらくさまざまなことを過去から受け継いで生きているはずだ。

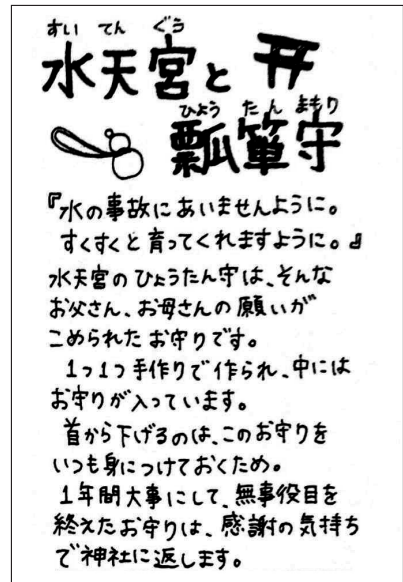


図3 久留米水天宮のひょうたん守りの説明



図4 「柳川掘割物語」最終章より

たとえば親や祖父母から聞いた昔話、または地域の行事、または映画やドラマの物語。知らず知らずのうちにさまざまな伝承の影響を受けている。だが、そのことを振り返って考えなければ、自分がいったい何を受け継いでいるのか自覚できない。たとえば天空の城ラピュタの主人公はそのペンダントが何を意味しているのか知らなかった。同じように、筑後地方でひょうたんを首にかけてもらった子どもたちも、そこに親のどんな気持ちが込められていたかを知らないだろう。そして子どもたちのころに胸をときめかした天空の城ラピュタという映画に、どのような作者の気持ちが込められていたかも気づかないだろう。

大切なことは、伝承の意味を、その当事者の視点にたって探ろうとすることだ。そのことで自分は何を受け継いでできているのか知ることができる。そしてそれは未来を決断し選択するときの根拠となるだろう。

この天空の城ラピュタのエンディングで流れる宮崎駿の作詞した主題歌<sup>19)</sup>には、そのような映画のメッセージが込められている。

さあ でかけよう ひときれのパン／ナイフ ランプ かばんにつめこんで／父さんが  
残した 熱い想い／母さんがくれた あのまなざし

父さんの残したものの、母さんがくれたものの、そのことを知ることによって、ふつうの私たちは、だれか1人の救世主に頼らずに、未来へ1歩を踏み出していくことができるのだろう。スタジオジブリの第1作、天空の城ラピュタという映画は、そういう伝承のあり方を描いた映画である。

### 【注】

- 1) 専攻は社会学。本来は対人サービス労働の対面的コミュニケーションの分析を研究しているが、偶然、スタジオジブリと筑後の関係について知り、筑後地域の大学の教員としてそのことを論文にしておくべきだと考えた。スタジオジブリの作品は、大学生のとき社会学をはじめたころから見続けてきた。
- 2) 二馬力・G、1986年『天空の城ラピュタ』（宮崎駿監督、高畑勲製作）。なお二馬力は宮崎駿の個人事務所である。
- 3) この現象は「バルス祭り」と呼ばれている。2013年の放送（日本テレビ系「金曜ロードSHOW!」）のときには「毎秒14万3199ツイートとツイッターの世界最高記録を更新」という。
- 4) 亀山は、のちのスタジオジブリの代表となる鈴木敏夫と同じように、当時、徳間書店アニメージュ編集部にも所属しながら宮崎駿、高畑勲の近辺にいて、その構想や映画成立を身近に体験できる位置にいた人物である（鈴木 2014：2章）。亀山は、風の谷のナウシカ、天空の城ラピュタなどの映画の製作委員会にクレジットで名前を連ねている。
- 5) 『The art of Laputa』（亀山1986）などの記述から筆者作成。
- 6) 15世紀にフランスを救ったとされる少女。神の啓示を聞いて軍隊を率いフランスを勝利に導くが、宗教裁判にかけられ火刑に処せられる。
- 7) 引用中の（ ）の補足は亀山（1986）による。
- 8) 宮崎駿はその後も原作となる漫画版「風の谷のナウシカ」を描き続け、このテーマを追い続けた。この連載は休載をはさみながら続けられ1994年に完結した。この漫画版の結末は

映画とは全く異なるものとなっており、論議を呼んだ。

- 9) この浄化運動は柳川暗渠事件として書かれる場合もある。暗渠とは地面に埋設した水路のことで、柳川では生活排水等で汚濁した掘割をコンクリートの下水に変えてしまう計画が持ち上がった。これに反対する市民運動が始まり、柳川の掘割が保存された。
- 10) 「発作のような感動」という宮崎駿の言葉からは、この感動が彼にあたえた永続的で決定的なものではなかったことを意味しているようだ。この点に関しては、宮崎駿の思想的変遷として論じる必要がある。しかし、1980年代半ばのジブリと筑後の関連を指摘するこの論文では、そこまで踏み込んで分析する余裕はない。
- 11) 当時、徳間書店アニメージュ編集者。のちにスタジオジブリ代表取締役。
- 12) 宮崎駿が柳川を訪れる2ヵ月ほど前の1月18日、三井三池炭鉱の有明鉱で、83名が死亡する大規模な坑内火災事故が起こっている。
- 13) ポムじいさんは、天空の城ラピュタの主人公が坑道に逃げ込んだとき2人を案内し、ペンダントの伝承の手がかりをあたえてくれる重要な脇役であり次のような独特なしゃべり方をする。「小鬼だ。小鬼がおる。はて、パズーによく似た小鬼だ。おまけに女の子の小鬼までおるわい」。「シェパードンの大佐の時計」では迷い込んだ主人公たちの冒険の道しるべとなるのがチャーリーじいさんである。彼は教会に住み込んで1人で番をしているが、独り言のような間接的な話し方をする独特のしゃべり方が特徴である。「男の子だ。それも、聖歌隊のな。その上、聖歌隊長と牧師さんとこの小鬼ときた」(Tuner 1964=1968, p.49)。
- 14) 実際、天空の城ラピュタと柳川掘割物語との関係についてインタビューを受けた宮崎駿は、柳川掘割物語がとりのこした「物語を楽しむ要素」を天空の城ラピュタで追求したと次のように答えている。  
その映画は日本人と水との関わりあいテーマにしているから、「風の谷のナウシカ」の延長は、そっちで展開しちゃっているし、本当の事を言うって僕だけポツンと取り残されてしましましてね。結局「風の谷のナウシカ」のテーマは、つきつめて、はっきり言えば、あとは手前は何をやるの？ っていう問題だけなんです。もう論じることは啓蒙することじゃないんですよ。はっきり言って、そうなんです。あとは〈物語を楽しむ〉問題しか残ってないんです。(野村 1986)
- 15) 水天宮は、壇ノ浦の戦いで入水し没した安徳天皇を祭る神社で、安産祈願、水難除けの信仰の対象として参拝者をあつめている(古賀 2013)。そのペンダントは、水難除けのペンダントとして、全国の総本宮が久留米にある水天宮神社で頒布されている。
- 16) 柳川市では2011年に誕生した柳川のキャラクター「こっぼりー」は、ひょうたんのペンダントをつけたマスコットである。
- 17) この学生の研究によって「柳川掘割物語」というドキュメンタリー映画の存在を知ることになった。そしてそのことがスタジオジブリと筑後、柳川との関連を考えるきっかけとなった。
- 18) 最終章以外でも、御守りをつけた子どもたちが遊んでいるシーンがある。たとえば、映画開始から51分21秒の箇所など。
- 19) 宮崎駿作詞、久石譲作曲「君をのせて」。

#### 【引用文献】

アニメージュ編集部編、1986、『The Art of Laputa』徳間書店。



- 亀山修, 1986, 「Introduction」アニメージュ編集部編『The Art of Laputa』徳間書店.
- 古賀瑞枝, 2013, 「水天宮信仰の展開について：久留米から江戸へ」佛教大学大学院紀要. 文学研究科篇 41, 1-18.
- 小坂和男, 1987, 「環境問題を映像化できる作家」『シネフロント』130: 16-18.
- 毎日新聞, 1984年4月22日『『風の谷のナウシカ』で新境地開いた宮崎監督』(=1996, スタジオジブリ責任編集『スタジオジブリ作品関連資料集I』徳間書店 p.51収録).
- 毎日新聞, 2013年8月5日「天空の城ラピュタ：14回目放送, 視聴率18.5%」東京夕刊.
- 宮崎駿, 1984, 「豊かな自然, 同時に凶暴な自然なんです」徳間書店編『ロマンアルバム 風の谷のナウシカ』徳間書店.
- , 1986a, 「個人的には『ナウシカ』からの連続性があるんです」徳間書店編『ロマンアルバム 天空の城ラピュタ』徳間書店.
- , 1986b, 「純な少年少女が困難を乗り越えてもっと幸せになってゆく天空の城ラピュタ『スローログ』1986年10月号 (=1996, スタジオジブリ責任編集『スタジオジブリ作品関連資料集I』徳間書店 p.119収録).
- , 1996, 「宮崎駿に聞く」(稲葉振一郎『ナウシカ解説 — ユートピアの臨界』窓社に収録されたインタビュー).
- , 2002, 「風の谷から油屋まで」『風の帰る場所 — ナウシカから千尋までの軌跡』ロッキング・オン.
- 水谷亜紀奈, 2000, 「2つのラピュタ — ラピュタ島と天空の城ラピュタ」愛知淑徳短期大学英文学会編 Athena (33), 1-12.
- 野村正昭, 1986, 「宮崎駿監督インタビュー 子供たちを夢中にさせる古典的な冒険活劇を」キネマ旬報 (941): 42-48.
- 中村信博, 2007, 「『天空の城ラピュタ』と『バベルの塔』: 廃墟が語る希望」同志社女子大学学術研究年報 58, 19-26.
- 西日本新聞, 2015年3月15日「福岡県／探訪 Trip 柳川に息づくカップ 掘割に像, 水天宮にお守り」朝刊筑後版.
- Pearce, A. Philippa, 1955, Minnow on the Say, Oxford University Press: London (=1984, 足沢良子訳『ハヤ号セイ川をいく』講談社).
- 鈴木敏夫, 2014, 『仕事道楽 新版 — スタジオジブリの現場』岩波書店.
- , 2013, 「借金を背負って出発した『スタジオジブリ』」(スタジオジブリ・文春文庫編『ジブリの教科書2 天空の城ラピュタ』文藝春秋).
- 堤奈津子, 2007, 「柳川掘割再生運動のその後 ~ナウシカ亡き後の柳川の模索」(久留米大学文学部情報社会学科卒業論文 (久留米大学文学部石橋研究室所蔵)).
- Turner, Philip, 1964, Colonel Sheperton's Clock, Oxford University Press: London (=1968, 神宮輝夫訳『シェパートン大佐の時計』岩波書店).
- Townsend, John Rowe, 1968, Pirate's Island, Oxford University Press: London (=1976, 神宮輝夫訳『海賊の島』岩波書店).
- 広松伝編, 1990, 『柳川掘割から水を考える — 水循環の回復と地域の活性化』藤原書店.
- 柳川市, 2008, 「特集・沖端水天宮大祭」広報やながわ2008年5月15日号 (第76号).
- 柳川市史編集委員会編, 2004, 『柳川歴史資料集第6集 柳川の民俗概観』柳川市.
- 柳川市史編集委員会・別編部会編, 2002, 『新柳川明証図会』柳川市.

**【引用映像作品】**

二馬力・GH, 1984, 『風の谷のナウシカ』(宮崎駿監督, 高畑勲製作).

二馬力・G, 1986, 『天空の城ラピュタ』(宮崎駿監督, 高畑勲製作).

二馬力, 1987, 『柳川掘割物語』(高畑勲監督, 宮崎駿製作).

**【謝辞】**

この論文にはたくさんの方から助言をいただきました。筑後のひょうたんの話を聞かせてくれた久留米市東櫛原東部子ども会のみなさん, 卒論で柳川のひょうたんのことを教えてくれた堤奈津子さん, 柳川に実家がある地理学研究者, 篠倉大樹さん, 経済学部 of 岩本洋一先生, 感謝いたします。